

Title	観光資源としての歴史空間：長崎市出島和蘭商館跡の復元整備事業
Sub Title	Historical space as tourism resource: a case of the project "Dejima Historic Site Renovation" in Nagasaki City
Author	織田, 竜也(Oda, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.63 (2006.) ,p.73- 85
Abstract	This paper considers a case that the historical space is reconstructed as tourism resource. We study the process and contemporary situation of the project "Dejima Historic Site Renovation " in Nagasaki. Here, "Historical Space" means the space lost in the present but was to be in the past. We think that reconstruction of these types of space means that they revive reality belongs to the past through various intellectual activities of human beings. Dejima is a land fill constructed in 1634. Tokugawa government closed Japan and moved Dutch trading house from Hirado to Dejima in 1641. After that Dejima is the only international contact point through the Japanese periods of isolation. Our philosophical interest is this. Why do they want lost historical space? How do they come reach a decision of authenticity of the past? And by what means do they claim the effectiveness as tourism resource? It is not a few that a local government gets involved in the development of tourism resource. However, in the case of the "Dejima Historic Site Renovation," the uniqueness of historical features of Dejima has an impact on this project. This uniqueness is very simple, that is "OGIGATA" spreads out like fan, the figure of Dejima. The "Renovation" of Dejima as historical space depends on the revival of this "OGIGATA" features. They spent energy to expose this features. They call this activity "KENZAIIKA," that is actualization of "OGIGATA" features. It is called; "OGIGATA" is the original "symbol" of Dejima. Its perfect revival means the reconstruction of the historical space, plays a role as historic site and has authenticity as tourism resource. First, this paper checks the review articles of sociology and anthropology of tourism. Second, we study the process of the project "Dejima Historic Site Renovation" in Nagasaki. Third, we look at contemporary situation; a local government collects the admission fee. We see that the collection of admission fee means obviously the commoditization of the space. However at the same time, by this setting, Dejima has been separated from the daily life space. People have aconsciousness of the specific properties. So we think that it means "socio-economic actualization" of Dejima as a result of this study.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000063-0073

観光資源としての歴史空間

——長崎市出島和蘭商館跡の復元整備事業——

Historical Space as Tourism Resource

—A Case of the Project “Dejima Historic Site Renovation” in Nagasaki City—

織 田 竜 也*

Tatsuya Oda

This paper considers a case that the historical space is reconstructed as tourism resource. We study the process and contemporary situation of the project “Dejima Historic Site Renovation” in Nagasaki. Here, “Historical Space” means the space lost in the present but was to be in the past. We think that reconstruction of these types of space means that they revive reality belongs to the past through various intellectual activities of human beings. Dejima is a landfill constructed in 1634. Tokugawa government closed Japan and moved Dutch trading house from Hirado to Dejima in 1641. After that Dejima is the only international contact point through the Japanese periods of isolation.

Our philosophical interest is this. Why do they want lost historical space? How do they come reach a decision of authenticity of the past? And by what means do they claim the effectiveness as tourism resource? It is not a few that a local government gets involved in the development of tourism resource. However, in the case of the “Dejima Historic Site Renovation,” the uniqueness of historical features of Dejima has an impact on this project. This uniqueness is very simple, that is “ÔGIGATA” spreads out like fan, the figure of Dejima.

The “Renovation” of Dejima as historical space depends on the revival of this “ÔGIGATA” features. They spent energy to expose this features. They call this activity “KENZAİKA,” that is actualization of “ÔGIGATA” features. It is called; “ÔGIGATA” is the original “symbol” of Dejima. Its perfect revival means the reconstruction of the historical space, plays a role as historic site and has authenticity as tourism resource.

First, this paper checks the review articles of sociology and anthropology of tourism. Second, we study the process of the project “Dejima Historic Site Renovation” in Nagasaki. Third, we look at contemporary situation; a local government collects the admission fee. We see that the collection of admission fee means obviously the commoditization of the space. However at the same time, by this setting, Dejima has been separated from the daily life space. People have a consciousness of the specific properties. So we think that it means “socio-economic actualization” of Dejima as a result of this study.

* 東京大学空間情報科学研究センター（文化人類学・経済人類学）

1. はじめに

本稿は歴史空間を観光資源として再構築する事例として、長崎市が中心となって進めている「出島和蘭商館跡復元整備事業」を取りあげ、復元整備事業の過程と現在の状況を考察する。

歴史空間とは、現在では失われてしまったが、過去において存在した空間領域を指す。その再構築とは、人間の様々な知的営為を駆使して、過去に所属するリアリティを現在の位置に復活させることである。人々はなぜ失われた歴史空間を求めるのか、過去の真正性はどのように決定されるのか、そして復元された歴史空間はどのように観光資源としての有効性を主張できるのか、といった複数の問いが本稿の主題となる。

自治体が観光資源の開発に積極的な姿勢を示す例は少なくない。しかしながら出島和蘭商館跡の場合、出島独自の歴史的特性が、復元整備事業に大きく影響している。その独自性はきわめて単純だが、「扇形」という出島の形象にある。後に詳しくみるように、歴史空間としての出島の復元は、「扇形」をめぐる展開している。いわば「扇形」は出島独自の「象徴」であって、その完全復元こそが歴史空間の再現となり、史跡としての役割を果たしながら、観光資源としての真正性を主張するのである。

近年、観光についての学術研究は非常に活発で、本稿でそのすべてを考察することは難しい。そこで概略的な研究動向を把握するために、研究分野を社会学と人類学に絞って、レビュー論文の概要を確認することとする。その後、大正期の史跡指定を契機に、現在まで長崎市が中心となって進めてきた「出島和蘭商館跡復元整備事業」の概要を検討し、観光資源としての出島、歴史空間の再構築過程を考察する。

2. 研究対象としての観光

2-1. 観光の社会学

観光の社会学 (Sociology of Tourism) の研究動向は、*Annual Review of Sociology* 所収の Cohen 論文 (Cohen, 1984) に詳しい。観光を取り上げた研究は社会科学全般では Bodio (1899) の論文に遡るが、「社会学」的研究は L. von Wiese (1930) が最初のものとなる。その後は目立った研究はなく、第二次世界大戦後にツーリズムへの関心が高まることで、批判的な議論を展開した Boorstin (1964) やフィールド調査に基づく考察を行った Nuñez (1963) の研究が登場する。1970 年代に入ると Cohen (1972) による類型論的研究や MacCannell (1973) による理論的統合が行われ、研究は急速に増加していく。

Cohen は観光の社会学を 8 つのパースペクティブに整理する。それぞれ①商業化されたホスピタリティとしてのツーリズム、②大衆化したトラベルとしてのツーリズム、③近代のレジャー行動としてのツーリズム、④伝統的巡礼の近代的多様性としてのツーリズム、⑤基本的な文化的主題としてのツーリズム、⑥文化変容過程としてのツーリズム、⑦エスニック関係の一類型としてのツーリズム、⑧ネオコロニアリズムの一形態としてのツーリズムである。

そこでの主要な論点は 4 つで、①ツーリスト、②ツーリストと現地との関係、③ツーリストシステムの発展と構造、④ツーリズムの影響である。テーマの詳細を眺めれば以下のとおりである。

①のツーリストについての研究は多様だが、経験的資料が豊富な点に特徴がある。そこでは人口統計学をベースに、旅行の頻度、目的、期間、種類などが調査された。全体としては行き先が国際的に拡大し、性別、年齢、収入などによって旅行の内容が異なることが明らかとなった (Young, 1973; Newman,

1973)。社会心理学的な関心としては、動機 (Crompton, 1979)、文化ショック (Cort & King, 1979)、態度 (Stoffle et al., 1979)、満足 (Pizam et al., 1978) などについても考察されている。MacCanell はツーリズムを巡礼の近代的な様式と捉え、「真正性への接近」を問題とする。すなわち聖なるものや真なるものを感じとるためには、日常社会を差異化するような儀礼的行動が求められるのである (MacCanell, 1973)。

②のツーリストと現地についての研究は、切り口を「ホスト / ゲスト (Smith, 1977)」と設定することで活性化した。反面、人間同士の相互作用に焦点が集まり、自然環境を含めて包括的に考察を行う研究は少ない。「ホスト / ゲスト」関係は連続する出会いと捉えることができ、現地のシステム (native system) とツーリストシステム (tourist system) の二重構造となる。後者の動きはとりわけ「ホスピタリティの商品化 (commoditization)」と概念化される (Greenwood, 1977)。ツーリストに対する現地の態度は歴史的な経験にも左右されるが、Doxey は 4 つの区分 (高揚感 (euphoria)、無関心 (apathy)、迷惑感 (annoyance)、敵意 (antagonism)) を設けて分析した (Doxey, 1976)。

③のツーリストシステムの発展と構造についての研究では、航空会社や旅行会社、添乗員やホテルなども調査対象となり、「発見 (discovery)/ 現地の反応と主導 (local response and initiative)/ 制度化 (institutionalization)」といったツーリズムの発展モデルも作成された (Noronha, 1977)。

関連して地理学からは「ツーリスト・エリア・サイクル」といった概念で「興隆 (evolution)/ 活発化 (involvement)/ 発展と強化 (development and consolidation)/ 低迷 (stagnation)/ 減退または再生 (decline or rejuvenation)」の 5 つをステージとするモデルが提出された (Butler, 1980)。

④のツーリズムの影響については「社会経済的研究 / 社会文化的研究」に分けられる。社会経済的研究では、外貨や所得、雇用、価格、利益配分、所有権、政府財源などが中心的なテーマとなり、旅行産業の発展などが含まれる。一般論としてはツーリズムの発展は現地に利益をもたらす。それゆえ政府も財源としての活用を狙い、観光化を進める傾向にある。だが外部の業者によって急速に産業が発展したようなケースでは、現地の受ける恩恵がほとんどない場合もある (Cleverdon, 1979)。

社会文化的研究は量が多く内容も多様だが、10 のカテゴリーに分類される (①コミュニティの外部との接合、②対人関係の性質、③社会組織の基盤、④社会生活のリズム、⑤移民、⑥分業、⑦社会階層の生成、⑧権力の分配、⑨逸脱行動、⑩慣習と技芸)。社会生活のリズムについては多くの研究者が指摘し、ツーリズム自体が季節と結びついた活動であって、同時に仕事と余暇の区分、家族生活、会社での休暇のとり方などに影響を与えることが論じられた (Boissevain, 1979; Clarke, 1981)。

結論として Cohen は、観光の社会学的研究は依然周辺の領域とみられているが、今後の展開、とりわけ理論と調査の融合的研究の発展に期待したいと述べている。

以上、Cohen 論文を導きに、観光の社会学に関する研究動向を確認した。続いて観光の人類学についての研究動向を確認する。

2-2. 観光の人類学

観光の人類学 (anthropology of tourism) の研究動向は社会学同様、*Annual Review of Anthropology* 所収の Stronza 論文に整理されている (Stronza, 2001)。彼女の整理では、観光を対象とする人類学的研究は 1970 年代以前までは世界的に少なく、例外的に Nuñez のメキシコをフィールドとした研究 (Nuñez, 1989) があるだけだった。

ところが雑誌 *The Annals of Tourism Research* の創刊以降¹、研究の数は飛躍的に増加し、大学のコースにも観光学科が設置されるようになった。観光は世界のあちこちで見出され、経済的にも大きな影響力を持つようになったが、とりわけ人類学者の注目を引いた理由は、観光に内在する「異文化交流性」にあったのではないかと推測する。

先行研究史のレビューとして、彼女は人類学における観光研究のテーマを「ツーリズムの起源」と「ツーリズムの影響」に分ける。ここでいう「起源」とはむしろツーリズム概念や定義の変遷であって、Lofgren (1999) の歴史的研究や MacCannell (1976) の民族誌学的研究をあげつつ、ツーリストの興味や関心が推移してきたことを指摘する。また Graburn (1989) や Turner & Turner (1978) がツーリズムを儀礼過程と捉えたことで、巡礼 (pilgrimage) との混交状況が示されたという。

「影響」については現地の経済・社会・文化的変化を探る研究が示される。経済についてはまず、観光は第三世界において外貨獲得や経済成長の有効手段とみなされる一方で、膨大な数のツーリストによって生態系が破壊されるといった、開発の両義性が指摘される。民族誌学的調査はこうした状況において、現地の問題を顕在化させる機能を担った。ここでは賃金労働の導入が日常生活コストを上昇させたスペインのケース (Oliver-Smith, 1989) や財の偏在化が新たな社会的摩擦を生み出したミクロネシア・ヤップ島のケース (Mansperger, 1995) が示される。

社会・文化については「文化の商品化 (commodification of culture)」がとりあげられる。観光を通じて物や儀礼は在来の意味を失い、商品として流通する。この過程はさらに文化の「真正性 (authenticity)」と関わり、文化のステレオタイプや誇張が現れるようになる。

この過程をツーリストの側から考察する場合の重要な概念として、Urry による「ツーリストのまなざし (the tourist gaze)」が提示される (Urry, 1990)。この概念は信仰を持たない人間が宗教施設を訪れるような場合のまなざしのことで、日本語では「見物」といったニュアンスである。

従来の議論では「文化の商品化」と「ツーリストのまなざし」の組み合わせは、市場経済化のネガティブな側面と捉えられることが多かった。しかしながら 1980 年代以降、観光に適應しながら新たな文化を生成するといったポジティブな解釈が現れる。例えば Gamper (1981) は、観光シーズンになると伝統的な衣装に身を包む南オーストリアのケースを示した。あるいは Albers & James (1983) はネイティブアメリカンを描いたポストカードを分析し、ツーリストの期待にあわせてネイティブたちが着飾り、普段着や日常生活が描かれないように配慮している様子を考察した。

こうして観光の人類学の焦点は、「ホスト/ゲスト」の相互作用へと移行する。とりわけ Howell (1994) が指摘するように、ホストとしての合衆国市民が「ツーリストと遊ぶ (toying with tourists)」ケースや、Adams (1995) が示すように、インドネシアにおいてダイナミックな観光状況をしたたかに生き抜く「活動的戦略家 (active strategists)」としてのトラジャなど、画一的な解釈は通用しない状況が展開する。

近年では「エコツーリズム (ecotourism)」や「もう一つのツーリズム (alternative tourism)」など新たな形態が生まれ、それへの人類学的対応は数を増している。基本的な枠組みはホストとしての現地と、ゲストとしてのツーリストの交流状況において、どのような影響が見られるのかという視角である。

だがここでも安易な一般化は難しい。例えばエコツーリズムの案内書にはツーリストの模範的な行為が示されるが、これは現地住人や自然環境への配慮であると同時に、ツーリズム産業の戦略と捉えるこ

¹ 1974 年創刊。

ともできる。さらには現地に対するポジティブな影響といっても、Bennett (1999) が示したパナマのケース（外部からの観光開発を阻止するために外部資本のホテルを焼き討ちして、オーナーをも襲撃するといった事件）は「現地」概念の再考を促す。

以上、研究地域の相違や主題が多様なために整理が困難な点も否めないが、Stronza 論文を導きに観光の人類学に関する研究動向を確認した。

3. 出島和蘭商館跡復元整備事業の概要

観光研究の近年の動向においては、ツーリズムに関わる主体を「ホスト/ゲスト」と概念化し、両者の関係を考察するものが主流となっている。だが本稿で取り上げる長崎市の事例は、自治体の積極的な観光開発という側面がありながら、同時に史跡の保存・活用といった学術的・教育的な性格を併せ持つものである。

概略的には、観光研究の文脈において「過去へのノスタルジー」といった概念で把握される人々の想像力が、出島の歴史空間を再構築する力として、自治体の一政策に組み込まれているものと理解できる。復元整備事業を促進する力としては長崎市民ばかりでなく、日本国民一般の期待として、あるいはオランダを中心とする国際的な要請として、資料には示される。この点で復元整備事業には「ホスト/ゲスト」関係には解消されない、複雑な集合性を確認することができる。この点に留意しつつ、復元整備事業の概略を時系列に沿って確認する。

3-1. 復元整備事業の沿革

出島は元来、1634（寛永 13）年に長崎町人 25 人が出資する形で築造された埋立地である。だが 1639（寛永 16）年のポルトガル船来航禁止に伴い、平戸にあった和蘭商館が 1641（寛永 18）年に出島へ移ることとなり、以後幕末にかけて、出島は日本唯一の海外交流の窓口として重要な位置を占める。その後 19 世紀後半には、出島は居留地へ編入されるが、中島川の港湾改良工事に伴う埋め立てによって市街地との境界がなくなっていく。

こうした歴史的経緯をもつ出島だが、1922（大正 11）年になると内務省布告第 270 号が出され、史跡名勝天然記念物保存法の規定により「出島和蘭商館跡」として史跡指定される。1951（昭和 26）年になると国際的な要請もあり、長崎市が史跡の整備事業に着手する。国の補助を受けつつ土地の公有化が進み、石造倉庫や庭園の整備も行われた。

1978（昭和 53）年には出島史跡整備審議会が発足し、1982（昭和 57）年、復元整備構想答申書が提出される。その後 1987（昭和 62）年には復元整備構想の一環として進められてきた資料調査の集大成となる『出島図一その景観と変遷』刊行され、1993（平成 5）年には、出島史跡整備研究会が整備計画の基本案を策定。翌年都市計画事業認可を受け、第二次出島史跡整備審議会が設置され、現在も復元整備事業の只中にある。

4. 復元整備構想

長崎市の諮問を受け、1978（昭和 53）年に出島史跡整備審議会が発足する。その内容は『復元整備構想—答申書』（以下、『答申書』）に詳しい（長崎市出島史跡整備審議会、1982）。審議会の当面の課題は、「どの時期の出島を復元するのか」という難問を解決することであった。内外の資料を収集・調査した結果、審議会は 19 世紀初頭を中心とする前後 20 年間の時期を復元目標に掲げる。

その理由は「19 世紀初頭を中心とする前後の 20 年間の時期において、その施設、景観等が最も整備せられ、また、現存する資料並びに文献の状態から見て、それを相当正確に知ることができ、復元整備することも可能であるとの判断に到達した（長崎市出島史跡整備委員会、1982, p. 8）」というものである。

その一方で、当時の出島は市街地化が進み、遺構などもほとんど残っていないのが実情であった。したがって審議会の次の課題は出島の境界線を調査し、その形状を改めて確定することであった。こうした状況を前提として、審議会は七つの構想を提案する。①出島遺跡の境界確認調査と範囲の確定、②史跡内民有地の公有化、③出島の建造物の復元整備、④出島庭園等の整備、⑤出島対岸民有地の公有化、⑥出島と江戸町を結ぶ橋の復元、⑦出島史跡整備に伴う周辺地区の環境整備である。

審議会はこれらの構想の実現を進め、『答申書』提出の段階では今後の継続的な調査を認めつつ、出島の境界線を確定する。現在の目から見ても審議会の成果は著しく、まとめるならば①復元目標とする時期の確定、②出島境界線の確定、③内外の出島関係資料の収集といった、復元整備事業の根幹を成す成果が達成されている。

5. 復元整備計画

長崎市は審議会の提出した『答申書』を受けて、具体的な復元整備計画の策定に入る。1987（昭和 62）年には審議会の要望にしたがい、審議会が収集した出島に関する内外の資料を『出島図—その景観と変遷』として刊行した（長崎市、1987）。1992（平成 4）年には、答申構想を進めるために長崎市出島史跡復元整備研究会が設置され、翌年には出島史跡を教育文化施設として、また中島川対岸地区を都市公園として都市計画の枠内に取り込み、公有化を促進した。

しかしながら、出島の完全復元は市街地の改造を含めた大規模なプロジェクトであり、相応の年月と費用が必要となる。そこで長崎市は復元整備の目標と手順を策定し、その達成を短中期計画と長期計画

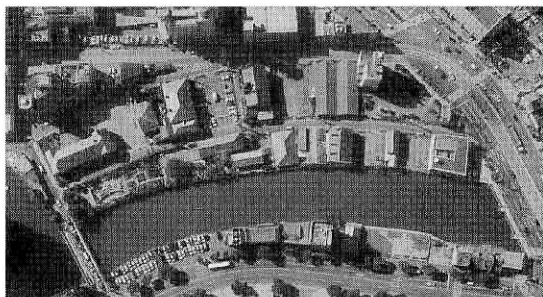


図1 1996（平成 8）年の航空写真（『復元整備計画書』資料編 p. 2, 部分）

に区分して、実現可能性を高めていく戦略を採用した。その内容は1996（平成8）年に作成された『復元整備計画書』（以下、『計画書』）に詳しい（長崎市、1996）。

5-1. 復元整備の目標

『計画書』によれば、復元整備の目標は以下の4つである。

- ①貴重な歴史的文化的遺産である出島史跡の遺構や遺物の保存を図るとともに、往時の建造物等を史実に基づいて復元し、文化・学習施設としての機能を目指す。
- ②長崎市のシンボルとして機能させるとともに、周辺都市空間を含めて市民が親しむことのできるアメニティ空間を構築する。
- ③歴史的観光拠点として、出島史跡の活用を図るとともに、出島周辺の歴史的遺産とのネットワーク化に努めていく。
- ④国際交流や文化活動の場としても積極的な運営を図っていく。

復元整備の目標としては、「文化・学習施設」や「アメニティ空間」など、完成後の用途を掲げる点が注目される。また「歴史的観光拠点」という文言は、復元整備事業が長崎市の観光戦略の一環として理解されることを示す。さらには「国際交流」や「文化活動」の場として展開する空間利用が期待されている。

5-2. 復元整備の手順

同様に『計画書』によれば、復元整備の手順は以下のとおりである。

- ①出島史跡と出島対岸の公園整備を中心として、出島の顕在化、史跡内の復元整備および展示活用を段階的に進めていく短中期復元整備を行う。
- ②19世紀初頭の出島の原形を復元し、更に四面を水面による顕在化に努め、原風景の再現を目指していくとともに周辺の都市機能、まちづくりとの調和発展を図っていく長期復元整備を行う。
- ③史跡内では復元建物等のハード面の整備だけでなく、往時の出島の生活風俗と文化的交流を幅広く表現していくものとし、文化活動を展開していくものとする。

まとめれば出島の復元整備事業は、短中期復元整備・長期復元整備を経て、文化活動を展開する歴史空間として現代的に活用されることが想定されている。とりわけ注意をひくのは、出島の「顕在化」という聞きなれない用語である。明治期以降の工事によって、出島の「扇形」が失われてしまったことは先に記した。『答申書』を提出した出島史跡整備審議会は出島の境界線を確定し、今度はその境界線を明らかに目に見える形で復元することが求められている。

『計画書』では19世紀初頭の出島の形状を「原形」を呼び、四面に水を張り巡らせることで「扇形」の復活を目指す。また当時の歴史空間を「原風景」と呼び、まちづくりの一環として復元整備事業は位置づけられていくのである。

5-3. 短中期計画

先に確認したように、復元整備計画は大きく「短中期計画」と「長期計画」に区分される。短中期計画の内容は五つに区分される。それぞれ①史跡の保存・公開、②建物・庭園の復元、③明治期建物の保存、④町並みの展示活用、⑤出島の顕在化である。

①史跡の保存・公開とは、現在の出島に残る遺構や遺物を、学術的な調査に基づいて保存・公開するものである。具体的には石造日時計、ケンペル・ツェンペリー記念碑、旗竿石、大砲、石垣、土層、建物礎石、出島橋石柱、デジマノキ、門柱、三角溝、居留地地番境石などが含まれる。

②建物・庭園の復元とは、現在入手可能な資料（主として出島図）に基づき²、出島を四つのエリアに区分、それぞれのエリアの建物を三段階で復元する。第一段階は出島の西・北ゾーン、第二段階は中央ゾーン、第三段階は東・南ゾーンである（図2参照）。

③明治期建物の保存とは、現在の出島に残る明治期に建設された建物である旧出島神学校、旧内外倶楽部、新石倉、旧石倉、出島橋を近代的遺産と評価し、その整備と活用を図るものである。

④町並みの展示活用とは、(1)学習機能、(2)啓蒙・啓発機能、(3)文化交流機能を果たすことを目指して、復元した史跡を展示活用することはもちろん、建物内部を整備して資料館や博物館としての役割をもたせ、さらには発掘調査の公開やフリーマーケットの設置など、文化交流を行うものである。

⑤出島の顕在化とは先に触れたとおり、現在では失われた出島の原形となる「扇形」を復元するものである。復元整備計画では出島の原形である「扇形」を象徴的な形状であると考え、その復元を「顕在化」と呼んでいる。

1858（安政5）年に和蘭商館は廃止されるが、出島は1866（慶應2）年に外国人居留地に編入され、翌年には南側外周に遊歩道が埋築、1877（明治2）～1893（明治26）年の第一次港湾改良工事によって



図2 復元の段階と現在までの状況（Website『甦る出島』より転載）

² 出島に滞在したフィッシャー (J. F. van Over Fisscher) 作成の出島模型（縮尺約 30 分の 1、ライデン国立民族学博物館所蔵）の調査結果なども踏まえている。

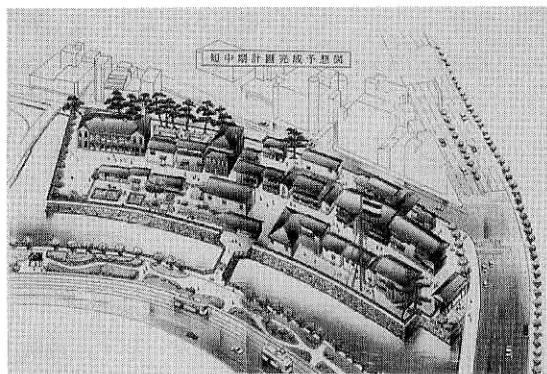


図3 短中期計画完成予想図（『復元整備計画書』p. 14）

北側約 18 メートルが削られ、1903（明治 36）年の第二次港湾改良工事では海域の埋め立てが進むなどして、「扇形」が失われていった経緯がある。ここでは石垣の復元作業などとも連動し、中島川公園の整備、電車軌道の変更、北側旧出島橋の架橋、東側出島橋の付け替え、水門部分の開削などの大規模な工事が含まれる。短中期計画の完成予想図は図 3 を参照のこと。

5-4. 長期計画

長期計画では、「出島の姿・形の完全復元」「四面の水面による顕在化」という 2 つの目標が掲げられる。具体的な過程は三段階に区分され、第一段階は北側の拡張に伴う中島川の流域整備、第二段階は西側水門部分の復元、南西側部分拡張に伴う国道 499 号の変更、第三段階は銅座川の振り分けなど、大規模な市街地改造を含むものである。

また上記の復元に伴い、いくつかの建物の復元、旧出島橋の架け替えなどが計画されている。短中期計画と比較すると計画内容は大きなものではあるが、短中期計画の完成状況に合わせて、改めて計画の検討が行われるものと考えられる。

6. 考 察

前章では、長崎市が中心となって進めてきた出島和蘭商館跡の復元整備事業の概要を確認した。長崎市は復元整備の目標として、「文化・学習施設」「アメニティ空間」「歴史的観光拠点」「国際交流・文化活動の場」といった空間利用を目指していた。

本章では「観光資源としての歴史空間」という観点から、とりわけ「歴史的観光拠点」としての出島の状況を考察する。その効果について、出島の入場者数の変化を検討し、現時点における「観光資源」としての出島の状況を考察する。

6-1. 入場者数の推移

復元整備事業は 2006（平成 18）年現在、短中期復元計画の只中にある。しかしながら長崎市は、内外の関心を集めて復元整備事業の重要性をアピールする、あるいは復元整備が進む出島の空間を効果的に利用するために、2006（平成 18）年 4 月より市街地と出島の間に仕切りを設けて、500 円の入場料を

表 1 出島入場者数の推移

月別	入場者数 (人)
2003 年 1 月	4,803
2 月	9,738
3 月	9,822
4 月	10,717
5 月	22,743
6 月	10,730
7 月	7,150
8 月	10,758
9 月	11,837
10 月	28,011
11 月	15,959
12 月	6,169
2004 年 1 月	6,044
2 月	6,595
3 月	8,564
4 月	10,240
5 月	22,575
6 月	10,606
7 月	5,541
8 月	8,811
9 月	11,071
10 月	24,473
11 月	16,896
12 月	6,889
2005 年 1 月	4,281
2 月	6,832
3 月	6,526
4 月	8,286
5 月	20,483
6 月	9,531
7 月	4,834
8 月	9,124
9 月	11,916
10 月	22,417
11 月	13,973
12 月	5,926
2006 年 1 月	1,749
2 月	...
3 月	...
4 月	40,238
5 月	71,765
6 月	32,767
7 月	26,526

『長崎市統計年鑑』『長崎市統計月報』より作成

注：2003 年 1 月～2006 年 1 月は「出島資料館」の入場者数。2006 年 4 月以降は有料となった「出島地区」への入場者数。長崎市民は無料で入場できるが、上記人数に含む。2006 年 1 月 16 日～3 月 31 日は休館。

徴収するようになった（長崎市民は無料）。

入場料の徴収は、復元整備の進行に伴って出島の境界が明示され、市街地との区別が明確になったこととも結びつくものである。長崎市の調査によって明らかとなった出島の「扇形」が、入場料を徴収することで社会経済的に再確認されるといった効果があるのではないだろうか。

この試みによって、入場者数はどのように変化したのか。以下、長崎観光課が作成した『長崎市統計年鑑』『長崎市統計月報』などから作成した入場者数の推移を表 1 に示し、いくつかの分析を行う。

6-2. 入場者数の比較

最近の出島の入場者数は、入場料が設定された 2006 年 4 月から 7 月までの統計資料が入手可能である。したがって 2003 年、2004 年、2005 年の 4 月から 7 月にかけての月別入場者数を、2006 年のものと比較してみる（表 2）。

2006 年だけを取り上げると、入場者数は 4 月（40,238 人）、5 月（71,765 人）、6 月（32,767 人）、7 月（26,526 人）であり、徐々に減少しているように見える。だが表 2 に示すように、2003 年から 2005 年の人数と比較してみると似たような動きを示しており、5 月が多く 7 月が少ないといった傾向を発見できる。

したがって 2003 年から 2005 年までの月別入場者数の平均をとり、2006 年の入場者数を比較してみた。結果は表 3 に示すとおりである。

過去 3 年の月別入場者数の平均と 2006 年同月の入場者数を比較すると、その増加率は 4 月（412%）、5 月（327%）、6 月（318%）、7 月（454%）となり、大幅に増加していることがわかる。

入場者数の増減に関しては大幅な増加を示していることから、出島の観光資源としての活用は、相応の成功を収めているとみなすことができる。その理由としては、まずは復元整備の着実な成果

表 2 入場者数の比較 (4 月～7 月)
(単位: 人)

	2003 年	2004 年	2005 年	2006 年
4 月	10,717	10,240	8,286	40,238
5 月	22,743	22,575	20,483	71,765
6 月	10,730	10,606	9,531	32,767
7 月	7,150	5,541	4,834	26,526

表 3 2006 年入場者数の増加比率 (4 月～7 月)
(単位: 人)

	2003～2005 年 の平均	2006 年	増加率
4 月	9,748	40,238	412%増
5 月	21,934	71,765	327%増
6 月	10,289	32,767	318%増
7 月	5,842	26,526	454%増

によって、立ち寄るに足るべき内容をもった歴史空間が再現されつつあることがあげられよう。

次に先にも触れたことだが、入場料の徴収はむしろ、出島の空間的独自性を、社会経済的に一層際立たせることとなった点を指摘しておきたい。筆者が実際に出島を訪れた印象として、入場料の徴収はたしかに経済的にはマイナスの印象をもたらす面もある。だが出島の場合には入場料の徴収によって、出島が市街地とは区分される特別な空間であると意識させる象徴的效果の方がより大きいと考えられる。

この意味で、出島の復元整備事業が目指す出島の「顕在化」「姿・形の完全復元」「四面の水面による顕在化」は、空間的に出島の範囲を周囲の街地から切り離し、訪問するに足る独自性を演出する最大の武器となる。歴史空間は現代世界において、日常の風景と溶け合いつつも、相容れない特殊性を主張しなくてはならないのである。

復元整備事業の沿革から判断すれば、史実に忠実な歴史空間の復元という命題が出島の「顕在化」を実現する理由であった。だが出島を「観光資源」とみなす観点からも、「顕在化」は必須の作業であるように思われる。

はじめに観光に関する社会学・人類学の研究動向を確認したが、そこで用いられる概念で出島の状況を端的に説明すれば、「出島は自治体の進める復元整備事業によって、歴史空間としての真正性を維持しながらも、入場料を徴収することで商品化の過程に編入された」と考えることができる。

だが出島の場合、入場料の徴収によってあらためて、日常生活空間と切り離された点に注目したい。すなわち、歴史空間の再現としての「顕在化」に加えて、入場料の徴収という仕組みが周囲の市街地との切断を実現し、「社会経済的顕在化」を実現したと考えておきたい。

7. 結 語

本稿で考察した出島の復元整備事業は、1922 (大正 11) 年の内務省布告による史跡指定以降、いくつかの段階を経て進められてきた。復元の目標は『答申書』の段階では、時間的には 19 世紀初頭を中心とする前後 20 年間で定められ、空間的にも出島の境界が確認された。これを継承した『計画書』において、歴史空間としての出島は「顕在化」されるべきものと位置づけられ、復元整備事業は着実に成果をあげていた。

さらに歴史空間として再構築された出島は「観光資源」としての活用が期待され、実際に入場者数の点で大きな成功を収めている。さらに管見では、入場料の徴収が出島の「社会経済的顕在化」として機能することを指摘した。

これまでの議論で理解されるように、出島の復元整備事業を貫く最も重要な課題は「顕在化」であった。「顕在化」は自治体の政策として、まずは史跡の保存・修復といった観点から重視され、次に「観光資源」としての有効性を発揮するために、また今後は「学習・教育機能」あるいは「アメニティ空間」

としての役割を果たすために、欠くことのできない課題であった。

復元整備事業に関わる人々はこの要求に応え、出島は現代において、着々とその姿を復元させつつある。過去へのノスタルジーは同時に歴史の真正性と結びつき、観光資源としての独自性とも関わるものであった。当然のことながら過去の再現といっても、時間を戻すわけにはいかない。故に過去の再現はきわめて現在的な行為である。今後はこの観点から、人々の心象や情緒に関わる調査を継続して行うものとする。

謝 辞

本研究の調査に際して、長崎市教育委員会事務局出島復元整備室次長の坂本洋一郎氏には、貴重なお時間を割いて有意義なお話を聞かせていただいた。また長崎市観光部観光企画課の方々には、突然の来訪に親切に対応してくださった。ありがとうございました。なお本研究は文部科学省科研費補助金基盤研究 (C)「空間の表象に関する宗教民俗学的研究 (研究代表者: 鈴木正崇)」の一環として行われた。

参考文献

- 長崎市 1996『史跡「出島和蘭商館跡」復元整備計画書』。
 長崎市 2002『甦る出島』Website. (<http://www1.city.nagasaki.nagasaki.jp/dejima/>)
 長崎市教育委員会 2001『国指定史跡「出島和蘭商館跡」西側 5 棟建造物復元工事報告書』。
 長崎市出島史跡整備委員会 1982『史跡 出島和蘭商館跡 復元整備構想 一答申書』。
 Adams, K. M. 1995 Making-up the Toraja? *Ethnology*, 34: 143-54.
 Albers, P. C., James, W. R. 1983 Tourism and the changing photographic image of the Great Lakes Indians. *Annals of Tourism Research*, 10: 123-48.
 Bennet, J. 1999 The dream and the reality. *Cultural Survival Quarterly*, 23: 33-35.
 Bodio, L. 1899 Sul Mocimento dei foresteri in Italia e sul dinero chi vi soendono. *Giornale degli economisti e annali di economia*, 15: 54-61.
 Boissevain, J. 1979 The impact of tourism on a dependent island. *Annals of Tourism Research*, 6, (1): 76-90.
 Boorstin, D. J. 1964 *The image*. New York: Harper & Row.
 Burns, Peter M. 1999 *An Introduction to Tourism and Anthropology*. London: Routledge.
 Butler, R. W. 1980 The concept of tourist area cycle of evolution. *Canadian Geographer*, 24(1): 5-12.
 Clarke, A. 1981 Coastal development in France. *Annals of Tourism Research*, 8(3): 447-61.
 Cleverdon, R. 1979 The Economic and Social Impact of International Tourism in Developing Countries. *Special report No. 6*. London: Economist Intelligence Unit.
 Cohen, Eric 1972 Toward a sociology of international tourism. *Sociology*, 39(1): 164-82.
 1984 The Sociology of Tourism: Approaches, Issues, and Findings. *Annual Review of Sociology*, 10: 373-92.
 Cort, D. and King, M. 1979 In press of culture shock among American tourists in Africa. *International Journal of Interculture*, 3(2): 211-25.
 Doxey, G. V. 1976 A causation theory of research inferences. *In The Impact of Tourism. Proceeding. 6th Annual Conference*. Travel Research Association. 195-98.
 Gamper, J. 1981 Tourism in Austria. *Annals of Tourism Research*, 8: 432-46.
 Graburn, N. 1989 Tourism as an agent of change. *In Smith 1989*. 21-36.
 Greenwood, D. J. 1977 Culture by the pound. *In Smith 1989*. 129-38.
 Howell, B. J. 1994 Weight in the risks and reward of involvement in cultural conservation and heritage tourism. *Human Organization*, 53: 150-59.
 Lofgren, O. 1999 *On Holiday*. Berkeley: University of California Press.
 MacCannel, D. 1976 Staged authenticity. *American Journal of Sociology*, 79(3): 589-603.
 Mansperger, M. C. 1995 Tourism and Cultural change in small-scale societies. *Human Organization*, 54: 87-94.

- Nash, Dennison 1981 Tourism as an Anthropological Subject. *Current Anthropology*, 22(5): 461-81.
- 1996 *Anthropology of Tourism*. Oxford: Pergamon.
- Newman, B. 1973 Holidays and social class. *Leisure and Society in Britain*. Smith, M. A. (ed.) pp. 230-40.
- Noronha, R. 1977 *Social and cultural demensions of tourism*. Washington DC: World Bank.
- Nunez, Th. A. 1963 Tourism, tradition and Acculturation. *Ethnology*, 2(3): 347-52.
- Pizam, A., Neumann, Y., Reichel, A. 1978 Dimensions of tourist satisfaction with a destination area. *Annals of Tourism Research*, 5(3): 314-22.
- Oliver-Smith, A. 1989 Tourist development and struggle for local resource control. *Human Organization*, 48: 345-52.
- Smith, Valene L. 1977 *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Stoffle, R. W., Last, C. A., Evans, M. J. 1979 Reservation-based tourism. *Human Organization*, 38(3): 300-6.
- Stronza, Amanda 2001 Anthropology of Tourism: Forging New Ground for Ecotourism and Other Alternatives. *Annual Review of Anthropology*, 30: 261-83.
- Turner, V. and Turner E. 1978 *Image and Pilgrimage in Christian Culture*. New York: Columbia University Press.
- Urry, J. 1990 *The Tourist Gaze*. London: Sage.
- Wiese, L. von 1930 *Fremdenverkehr als zwischenmen-schliche Beziehung*. Arch. Fremdenverkehr.
- Young, G. 1973 *Tourism-Blessing or Blight?* Hatmondsworth, England: Penguin.